

説 説

「看護学生のコミュニケーションスキル」の概念的枠組み

磯野さよ子*, 前田ひとみ**

Communication skills of nursing students : Definition and conceptual framework

Sayoko Isono*, Hitomi Maeda**

Key words: nursing students ,communication skills, conceptual framework

受付日 2022 年 10 月 21 日 採択日 2023 年 1 月 19 日

*熊本大学大学院保健学教育部 **熊本大学大学院生命科学研究部

投稿責任者：前田ひとみ hmaeda@kumamoto-u.ac.jp

I. はじめに

2019 年の看護基礎教育のカリキュラム改正において、コミュニケーション能力の更なる強化の必要性が示された¹⁾。一方、新型コロナウイルス感染症 (Coronavirus Disease 2019 : COVID-19) の影響による行動制限により、対面でのコミュニケーションの機会が減少してきている。またマスク着用などによりこれまでとは異なるコミュニケーションスキルが求められている。何をもちて看護学生がコミュニケーションスキルを獲得したと言えるのかの判断については統一した見解がないため、看護学生のコミュニケーションスキルの獲得に向けた教育に課題を感じている看護基礎教育者は少なくない。

看護師における患者とのコミュニケーションスキルに関して、上野²⁾は「対人関係を円滑にし、また看護に必要な情報を収集するための能動的な技術。言語的コミュニケーション能力と非言語的コミュニケーション能力を含むものである。」と述べている。また、藤本ら³⁾は、コミュニケーションスキルとは「言語・非言語による直接的コミュニケーションを適切に行う能力である。」と述べ、文化・社会への交流・適応において必要な能力の基盤に、コミュニケーションスキルが位置するという階層構造を示して

いる。教育的介入における看護学生のコミュニケーションスキルに関する研究で用いられている頻度の高い尺度に基本的コミュニケーションスキル測定尺度 (iksy)⁴⁾、ENDCOREs³⁾、社会的スキル測定尺度 KiSS-18⁵⁾がある。iksyとは、言語的側面と非言語的側面の2側面と伝える(伝達)機能と受け取る(受容)機能の2側面を相互に組み合わせた「いう(iu)」、「きく(kiku)」、「する(suru)」、「よむ(yomu)」のローマ字の頭文字を合わせたものであり、大学生を対象に開発された人間のコミュニケーションスキルを網羅する尺度⁴⁾である。社会的スキル測定尺度 KiSS-18⁵⁾は、成人を対象に開発された尺度であり、尺度名からわかるように、対人関係を円滑に運ぶために役立つスキルを測定する尺度である。そのため、情報伝達や意思疎通を図るコミュニケーションスキルだけではなく、ストレスを処理するスキルといった人間関係を円滑に行う技能が含まれている。また、ENDCOREs³⁾は大学生を対象に開発された尺度であり、コミュニケーションスキルを「表現力」「自己主張」の表出系・「解読力」「他者受容」の反応系・「自己統制」「関係調整」の管理系から構成している。一方で、「自己統制」はコミュニケーションに関する統制機能を意味することから、厳密に言えばコミュニケーションそのものとはいえない項目が含まれてい

るという指摘もある⁴⁾。これらの尺度から、コミュニケーションスキルには、伝達する力、受け取る力、自己の感情や関係性を調整する力が含まれると考えられるが、それぞれの尺度に特有なものも含まれている。また、これらの尺度は、一般大学生や成人を対象として作成された尺度である。看護職の役割は、人々の権利を尊重し、人々が自らの意向や価値観にそった選択ができるよう支援する⁶⁾ことであるため、看護学生のコミュニケーションスキルにおいては、これまでに示されている要素とは異なるものがあることが推察できる。

コミュニケーションスキルの形成に影響する要因としては、青年期における友人関係満足度⁷⁾、大学生の家族との情緒的つながり⁸⁾など、周囲の影響が示されている。しかし、看護学生のコミュニケーションスキルが形成されるためにはどのような条件が満たされていなければならないのか、また、コミュニケーションスキルの形成は看護学生にどのような結果をもたらすのかを明らかにした研究は少ない。看護学生のコミュニケーションスキルを構成する要素、コミュニケーションスキルの獲得に関わる要因やプロセスの関連が明らかになれば、看護学生が意図的にコミュニケーションスキルを習得する手段やスキル獲得の評価指標が明確になり、授業設計に必要なコミュニケーション教育の体系化を図ることができると考えた。そこで、本研究は、看護学生のコミュニケーションスキルの獲得という現象を明らかにするための基礎資料として、文献検討から看護学生のコミュニケーションスキルの枠組みと定義を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究の対象文献について

コミュニケーションスキルは、文化・社会への交流・適応において必要な能力の基盤に位置している⁹⁾ことから、今回は和文論文のみを対象とした。看護学生のコミュニケーションスキルに関連した論文の検索は、医学中央雑誌 Web で行った。文献検索は1991年から2021年を対象に、「看護学生」and「コミュニケーションスキル or コミュニケーション技

術)」の検索式で行い、得られた原著論文は190件であった。これらの内容を確認し、除外条件を①文献検討であるもの、②コミュニケーションスキルの変化を調べていないもの、③具体的なコミュニケーションスキルが示されていないもの、④外国語のコミュニケーションスキルに関するものとし、65件の対象論文を抽出した。

2. 文献の分析方法

本研究ではコミュニケーションスキルに先行する要因やプロセスを含んだ枠組みを明らかにすることを目的としていることから、Rodgers の概念分析の手法⁹⁾を参考に分析した。Rodgers の概念分析は、概念はダイナミックに変化するものであり、境界が曖昧で、文脈依存のものであるという哲学的基盤をもとにしている。概念の辞書的定義ではなく、文脈に基づいた真実、本質、普遍性を志向した個性記述的な一般化から概念を明らかにする¹⁰⁾ために、Rodgers の概念分析の手法を参考に属性、先行要件、帰結に分類して、統合する帰納的アプローチ法を用いた。属性とは、事物の基本的な性質、すなわちその性質によって初めてその事物が可能となるような性質(本質)を意味し、偶有性や様態と区別されて使われる¹¹⁾。つまり、たまたま起こった様子や状態ではなく、不可欠な本質が属性である。先行要件とは、現象の引き金となる事象¹²⁾である。帰結は、ある事柄を原因または理由として、そこから結果として出てくる事態、また、仮定もしくは前提から推論によって導き出される結論である¹³⁾。この手法を参考に、2名の研究者で意見が一致するまで文献の内容を検討し、属性、先行要件、帰結にあたる記述内容を単語あるいは句の単位で各文献から抽出し分類した後、内容の類似性によって分類、整理し、抽象度を上げてカテゴリー化した。

III. 結果

65件の対象論文の対象者の内訳は、看護専門学校の学生が29件、看護系大学生が36件であった。

1. 「看護学生のコミュニケーションスキル」の属性
「看護学生のコミュニケーションスキル」の属性

は、[自己知覚]、[他者理解]、[伝達]、[相互作用]の4大カテゴリーと【自己理解】【自己統制】【自己開示】【自己主張】【他者受容】【解読力】【言語表現】【身体言語表現】【他者への配慮】【相互理解】【内省と表出の促し】の11カテゴリーと42サブカテゴリーに抽出できた。以下、大カテゴリーを[]、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》、抽出した記述内容を“ ”で示す。

【自己理解】は、《自分のコミュニケーションの理解》《自分の内面を知る》《自分を客観視する》のサブカテゴリーから、【自己統制】は、《感情と行動をコントロールする》《感情のコントロール》から、【自己開示】は、《気持ちや思いを伝える》《自己の心を開く》から、【自己主張】は、《自分の意見や考えを主張する》《自分の意見や考えを明らかにする》から構成された。この4カテゴリーは、自己の気持ちや思いの認知、それらを他者へ発することを意味していることから、大カテゴリーとして[自己知覚]と命名した。

【他者受容】は、《受け入れ》《承認》《傾聴》《共感》《パーソナルスペース》のサブカテゴリーから構成され、《全神経を集中しながら、その人の言うことに耳を傾ける》¹⁴⁾などがあつた。【解読力】は、《考えや気持ちを正しく読み取る》《メッセージの意味の解釈》《情報収集》のサブカテゴリーから構成され、《文脈から患者の感情や思考などを読み取る能力》¹⁵⁾などがあつた。この2カテゴリーは他者を受け入れ、考えや気持ちを理解することを示していることから、大カテゴリーとして[他者理解]と命名した。

【言語表現】は、《伝える》《説明力》《問いかけ》のサブカテゴリーから構成され、《言いたい要点を相手に伝えられる》¹⁶⁾などがあつた。【身体言語表現】は、《非言語的表現》《タッチング》《表出》《表現力》のサブカテゴリーから構成され、《観察したことを表現する》¹⁷⁾、《非言語的スキルと言語的コミュニケーションの併用》¹⁸⁾などがあつた。この2カテゴリーは、他者にメッセージを伝えることを示すことから、大カテゴリーを[伝達]と命名した。

【他者への配慮】は《環境設定》《タイミング》《話題》《表情》《視線》《沈黙》《声の表現》《態度》《対話》、【相互理解】は《相手に合わせた話し方》《要約》

《いいかえ》《関係調整》《対象者以外とのコミュニケーション》、【内省と表出の促し】は《内省を促す》《感情や考えを引き出し言語化を促す》《自己決定を促す》《行動を促す》のサブカテゴリーから構成され、他者と自己の相互に作用していることを示すことから大カテゴリーを[相互作用]と命名した。この大カテゴリーには、“声かけの声の大きさや話すスピード”¹⁴⁾だけでなく、“周囲の人間関係にはたらきかけ良好な状態に調整する”¹⁹⁾などがあつた。

2. 「看護学生のコミュニケーションスキル」の先行要件

先行要件は【学生の内的状況】と【周囲の環境】の2カテゴリーと6サブカテゴリーが抽出できた。

【学生の内的状況】は、学生の理解度や心理的状态を表し、《学生のレディネス》《学生の悩みや課題》《人間観の理解》のサブカテゴリーで構成された。《学生の悩みや課題》には、“看護過程のためのコミュニケーションとなり患者主体でない”¹⁵⁾や“意図的なコミュニケーションに捉われてしまうことの悩み”¹⁵⁾などがあつた。【周囲の環境】は《相手の状態》《場面の状況》《人的環境》のサブカテゴリーで構成され、実習メンバー、教員、指導者等多くの人と関わる環境が含まれていた。

3. 「看護学生のコミュニケーションスキル」の帰結

帰結は、【対象者との関係性の広がり】と【看護学生としての成長】の2カテゴリーと4サブカテゴリーで構成された。【対象者との関係性の広がり】と【深化】のサブカテゴリーは《対象者との関係性の深まり》《対象者への影響》で構成された。さらに、《対象者との関係性の深まり》は“人間関係を深める”²⁰⁾、“患者 - 看護師関係を形成”²¹⁾、《対象者や患者への影響》は“相手の内面的成長を促す”¹⁸⁾、“患者の自己効力を高める”²²⁾があつた。

【看護学生としての成長】のサブカテゴリーは《自己の成長》《学修効果》で構成された。さらに、《自己の成長》は“患者の自己効力を高めるコミュニケーションへの自信”²²⁾、“医療者・看護師としてのコミュニケーションのあり方を深めていく”²³⁾、《学修効果》は“看護実践の手段として活用するための知識の統合”²⁴⁾、“行動を創造していく段階的な学習”²⁵⁾などのコードが含まれた。

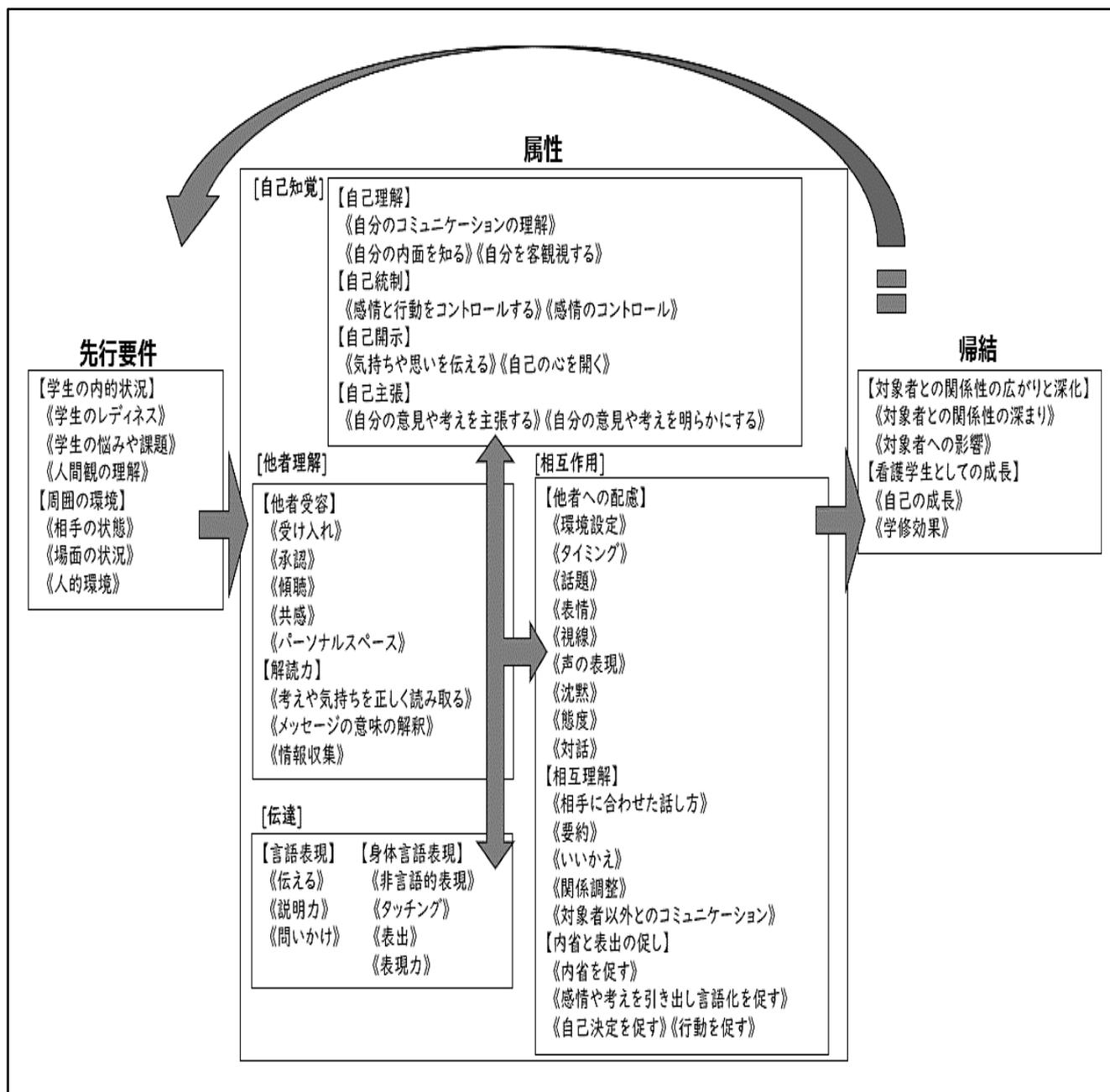


図 1 看護学生のコミュニケーションスキルの枠組み

4. 「看護学生のコミュニケーションスキル」の枠組み

抽出できたカテゴリーから、「看護学生のコミュニケーションスキル」の枠組みを図 1 に示す。

「看護学生のコミュニケーションスキル」の前提要件として、【学生の内的条件】と【周囲の環境】があり、属性の 4 個の大カテゴリーのスキルが相互

に関連して、帰結である【対象者との関係性の広がりと深化】と【看護学生としての成長】をもたらすことが示された。さらに、これらは、先行要件の【学生の内的状況】にもつながることから、先行要件・属性・帰結が循環しながら看護学生が成長するスキルであることが示された。

IV. 考察

先行研究の分析結果から、看護学生のコミュニケーションスキルに必要な前提要件として、患者・実習指導者・教員がいるその場の状況や患者と関係性を築く【周囲の環境】の理解に加え、看護学生自身のコミュニケーションへの苦悩や課題に関する【学生の内的状況】の自己理解が関係していることが示された。中村ら²⁶⁾は、看護学生のコミュニケーションスキルと自我状態を示すエゴグラムが関連することを示している。自我状態は思考や感情、それらに関連した行動様式を統合したシステム²⁷⁾であることから、本研究で抽出された、「学生のレディネス」、「人間観の理解」と関連するものだと考える。青年期の時期にあたる看護学生は、周囲の影響を受けながら一人の大人として自分を確立する自分探しの時期である。意図的なコミュニケーションに捉われてしまい患者主体になっていない《学生の悩みや課題》や患者、教員、指導者等も含んだ【周囲の環境】は、看護学生のコミュニケーションスキルの前提要件として看護学生のおかれた状況を反映していると考えられる。

看護学生のコミュニケーションスキルの属性として[自己知覚][他者理解][伝達][相互作用]が示された。このことから、コミュニケーションスキルの発信先は自己、他者、自己と他者の双方に分類できると考える。他者との意思疎通を図るための良好なコミュニケーションには、自分の感情を処理し、意見や相手にしてほしいことを要求できる力が求められ⁴⁾、それには、自分のコミュニケーションの傾向に気づき、自分を客観視して反応と言動を自己一致させる[自己知覚]が基盤になると考える。

[他者理解]は、【他者受容】と【解読力】で構成された。【他者受容】には看護師が病状や思いを《受け入れ》る際に用いる《承認》《傾聴》《共感》に加え、療養環境での立ち位置、距離、身体の向きといった《パーソナルスペース》があることが示された。【解読力】には対象者の感情や思考を読み取ることや、診療記録や話の流れから看護のアセスメントに必要な《情報収集》が含まれた。看護における情報収集は、一般的な普段の生活では踏み入れられない療養

環境や日々変化する対象者の状況や文脈からその場の空気を読み、メッセージの意味を解釈する【解読力】が求められる。信頼関係が築かれていない状況で相手の心の中に土足で入ることは倫理的にも問題であり、特に病を持った対象者との関係性を築くためには、相手の親和性を意味する対人距離である《パーソナルスペース》は重要な要素である²⁾。このことから《パーソナルスペース》は、看護学生のコミュニケーションスキルとして重要だと考える。

[伝達]は【言語表現】【身体言語表現】で構成された。対象者とのコミュニケーションには言語や身体を用い、ケアの説明や情報を相手にわかりやすく《伝える》、《説明力》に加え、言葉だけでなく、身体接触の《タッチング》などの《非言語的表現》が含まれたことから、看護学生にはこれらについての学習が求められる。また、【言語表現】には、対象者に対する《問いかけ》が含まれていた。看護学生が理解していることを《問いかけ》を通して伝達することにより、お互いの理解を深める。《問いかけ》は対象者の新しい考えを創出したり、考えを明確にしながらメタ認知が行われることから、知識を変形モデルへの発展を促す重要な意味をもたらすプロセスである²⁸⁾。このことから《問いかけ》は[他者理解][相互作用]につながるコミュニケーションスキルであると考えられる。

[相互作用]は自己と他者との関わりを示していた。[相互作用]には、《環境設定》を行い、《タイミング》をみて《話題》を提供し、《表情》《視線》《声の表現》《沈黙》と対象者に配慮した《態度》で《対話》を行うといった【他者への配慮】が必要なことが示された。そして、《相手に合わせた話し方》で情報から理解できたことを《要約》《いいかえ》をしながら《関係調整》し、【相互理解】を図っていく。さらに、【内省と表出の促し】として《内省を促す》《自己決定を促す》《感情や考えを引き出し言語化を促す》《行動を促す》が抽出できた。対象者の内省・自己決定・感情や考えの言語化・行動化を促すコミュニケーションスキルは、《問いかけ》でも述べたように、相互の関係が深まり、対象者の内面的成長や療養に対する意思を高める。比嘉¹⁸⁾は、看護学生の援助的コミュニケーションスキルを【スピリチュアルスキル】

【メンタルスキル】【非言語的スキル】で構成しており、【スピリチュアルスキル】には、話題を誘導し内省を促すことで、心持ちや意識内容の意味づけや言語化することを含んでいる。対象者の自立を促すためには、対象者の《内省を促す》《感情や考えを引き出し言語化を促す》ことに留まるのではなく、《自己決定を促す》さらには、《行動を促す》コミュニケーションスキルが求められることがわかった。また、対象者の周囲には家族・看護師・多職種、看護学生の周囲には指導者・教員・実習メンバーが存在しており、《対象者以外とのコミュニケーション》も取りながら【相互理解】を深め、患者対看護学生との関係を築いていく必要がある。このように[相互作用]のコミュニケーションスキルは[自己知覚][他者理解][伝達]のコミュニケーションスキルに加え、対象者の自己決定や行動を促すコミュニケーションスキルであり、看護学生に求められる特徴的なコミュニケーションスキルであると考えられる。

[自己知覚][他者理解][伝達][相互作用]のコミュニケーションスキルを用いて対象者にかかわることで、対象者を理解し、対象者との関係性が深まることで、人間観が養われ、帰結である【対象との関係性の広がり】と【看護学生としての成長】がもたらされると考える。【看護学生としての成長】は、先行要件の【学生の内的状況】に変化をもたらすことから、看護学生のコミュニケーションスキルは、先行要件・属性・帰結を循環しながら看護学生が成長していくプロセスだと言える。

以上の結果より、看護学生のコミュニケーションスキルは、「学生の状況と対象者を取り巻く状況に応じて、学生自身を理解・開示することで対象者を理解し、相互のかかわりの中で人としての基本的な関係性を持ち、対象者の感情・考え・行動を引き出すはたらきかけを行うことによって、看護学生としての成長をもたらすスキル」と定義できると考える。

V. 研究の限界と今後の展望

COVID-19 パンデミックによる疾病構造の変化、遠隔コミュニケーション技術²⁹⁾の発達、その他の社会状況の変化に伴い、看護学生のコミュニケーション

ンスキルの構成する概念は変化する可能性があることから、海外文献も含めた更なる検討が必要であると考えられる。また、本研究の更なる信頼性・妥当性を確認するために、今後、量的研究による検討を行うことが求められる。

VI. 結語

65件の先行研究から「看護学生のコミュニケーションスキル」を構成する先行要件、属性、帰結を分析し、看護学生のコミュニケーションスキルの構成要素と定義を明らかにした。

1. 「看護学生のコミュニケーションスキル」の属性は、[自己知覚]、[他者理解]、[伝達]、[相互作用]の4大カテゴリーと【自己理解】【自己統制】【自己開示】【自己主張】【他者受容】【読解力】【言語表現】【身体言語表現】【他者への配慮】【相互理解】【内省と表出の促し】の11カテゴリーと42サブカテゴリーが抽出された。
2. 先行要件は【学生の内的状況】と【周囲の環境】の2カテゴリーと6サブカテゴリーが抽出された。
3. 帰結は、【対象者との関係性の広がり】と【看護学生としての成長】の2カテゴリーと4サブカテゴリーが抽出された。
4. 看護学生のコミュニケーションスキルは、「学生の状況と対象者を取り巻く状況に応じて、学生自身を理解・開示することで対象者を理解し、相互のかかわりの中で人としての基本的な関係性を持ち、対象者の感情・考え・行動を引き出すはたらきかけを行うことによって、看護学生としての成長をもたらすスキル」と定義できた。
5. 看護学生のコミュニケーションスキルは、先行要件・属性・帰結を循環しながら成長していくスキルであることが示された。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省：看護基礎教育検討会報告書，2019 <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>（検索日2022年3月15日）
- 2) 上野 栄一:看護師における患者とのコミュニ

- ケーションスキル測定尺度の開発,日本看護科学会誌,25(2):47-55,2005.
- 3) 藤本 学 他: コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み,パーソナリティ研究,15(3):347-361,2007.
 - 4) 正保 春彦 他: 基本的コミュニケーションスキル測定尺度 ikxy 作成の試み,茨城大学教育学部紀要(教育科学),63:527-536,2014.
 - 5) 菊池 章夫: KiSS-18 (kikuchi's Social Scale- 18 項目版),1988/ 堀 洋道 監修,吉田 富二雄 編集:心理測定尺度集Ⅱ.初版第14刷,170-174,サイエンス社,東京,2014.
 - 6) 日本看護協会: 看護職の倫理綱領,2021
https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/rinri/code_of_ethics.pdf (検索日 2022年10月1日)
 - 7) 牧野 幸志: 青年期におけるコミュニケーション・スキルと友人関係ー同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルの性差,学年差の検討ー,経営情報研究,20(1)号:17-32,2012.
 - 8) 秋山 依乃里 他: 大学生における家族関係と自己効力感がコミュニケーション・スキルに及ぼす影響の検討,岡山心理学会第68回大会発表論文集,43-44,2020.
 - 9) Rodgers, B.L., Concept analysis: an evolutionary view, In: Rogers, BL et al. (Eds.): Concept Development in Nursing: Foundations, Techniques, and Applications. 2nd ed.:77-102. Saunders, Philadelphia,2000.
 - 10) 濱田 真由美: Beth L. Rodgers の概念分析についてー哲学的基盤に基づく目的と結果の再考ー,日本赤十字看護学会誌,17(1):45-52, 2017.
 - 11) デジタル版 日本大百科全書(ニッポニカ): (検索日 2022年10月04日)
 - 12) 上村 朋子 他: 概念分析の手法についての検討ー概念分析の主な手法とその背景ー,日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report, 3:194-207,2005.
 - 13) デジタル大辞泉: (検索日 2022年10月04日)
 - 14) 古市 清美 他: 認知症高齢者とのコミュニケーションにおける看護学生の学び,ヘルスサイエンス研究,16(1):61-64,2012.
 - 15) 相川 美子: 看護学生のコミュニケーション技術に関する思いの実施 看護師養成所3年課程の各年次の学生に焦点をあてて,神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録 教員・教育担当者養成課程看護コース 38:52-59,2013.
 - 16) 江藤 和子 他: 精神看護学における SST の学習効果の検討,日本精神科看護学術集会誌,56(2):231-235,2013.
 - 17) 高橋 ゆかり 他: 看護学生における統合失調症慢性期患者とのコミュニケーション技術の特徴ー幻覚・妄想の症状レベルに着目してー,日本看護学会論文集: 看護教育,38:168-170,2008.
 - 18) 比嘉 勇人 他: 看護学生を対象とした援助的コミュニケーションスキル測定尺度 β (TCSS- β) の開発および信頼性と妥当性の検討, 富山大学看護学会誌, 14(1):31-39,2014.
 - 19) 島村 美香 他: 統合実習が看護学生の基本的コミュニケーション・スキルに及ぼす影響ーENDCOREsを用いたスキル・タイプの検討ー,九州看護福祉大学紀要, 20(1), : 53-63,2019.
 - 20) 椎野 雅代 他: 看護学生の精神看護学実習後における SST の学習効果 会話技能技術と対人関係技術の検討, 日本精神科看護学術集会誌, 58(2):215-219,2015.
 - 21) 高橋 ゆかり 他: 看護学生の慢性期統合失調症患者とのコミュニケーションの特徴ー精神看護学実習におけるコミュニケーション技術使用回数の変化ー,日本看護学会論文集 看護教育,37: 159-161,2006.
 - 22) 塩見 和子: 対話文作成の演習により患者の自己効力感を高めるコミュニケーションの理解を目指した授業の成果,国際ナショナル Nursing Care Research 12(2):141-149,2013.
 - 23) 本田 優子 他: 授業と実習を通じた看護学生のコミュニケーション能力の縦断的变化とその背景要因,創価大学看護学部紀要, 5:5-17,2020.
 - 24) 安木 順子: 基礎看護学実習における看護学生のコミュニケーションの変化ーテキストマイニングによる分析からー,神奈川県立保健福祉大

学実践教育センター看護教育研究集録 教員・
教育担当者養成課程看護コース,38:135-142,
2013.

- 25) 武内 和子 他：看護場面に生じる沈黙の捉え方
における看護学生と看護師の比較 患者との初
回対話の場面想定法を用いた質問紙調査,ここ
ろの健康,33 (1):23-32,2018.
- 26) 中村 小百合 他：看護学生のコミュニケーション
スキル育成に関する研究(第2報)ーピー
ク・エゴグラムとボトム・エゴグラムからの分
析ー日本看護医療学会雑誌,9(2):27-32,2007.
- 27) 桂 載作 他：交流分析入門(第2版),8-12,株式
会社チーム医療,東京,2007.
- 28) 大井 恭子 他：「知識伝達モデル」から「知識変
形モデル」への発展を志向するアカデミック・
ライティング指導ー「問いかけ」とピア・レビ
ューの重要性に着目してー,千葉大学教育学部
研究紀要,54:105-117,2006.